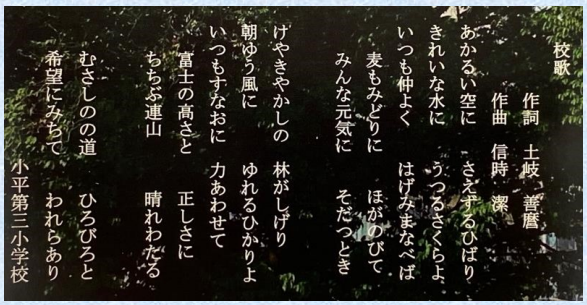
小平市立小平第三小学校の紹介

～我が校の児童の活動～



本校は明治 13 年に桜蔭学校として開校し、昨年度、開校 140 年を迎えました。

平成 21 年度からコミュニティスクールの指定を受け、学校・地域・家庭・教育委員会が互いに育て合い，子ども一人ひとりが輝く「たのしい学校」をめざしています。平成 25 年には地域による学校支援活動・三小ちゃんネットワークが文部科学大臣から表彰されました。

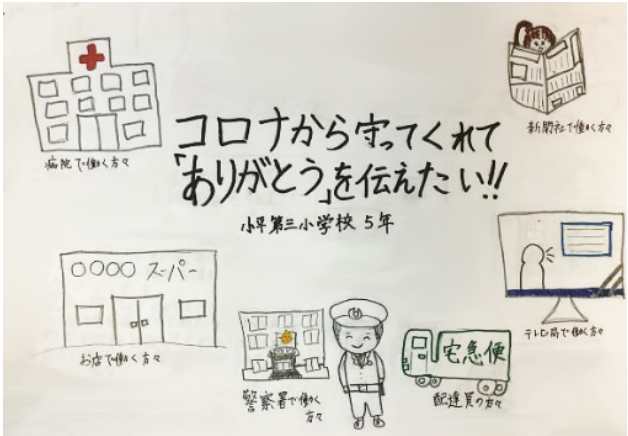
現在、特別活動の研究で文部科学省・国立教育政策研究所　教育課程実践検証協力校、小平市教育委員会　特色ある教育活動推進校の指定を受けています。また、青少年赤十字加盟校、東京消防庁応急手当奨励教育機関にも認定されています。

コロナ禍の休校中、「ピンチはチャンス」と捉え、オンライン朝の会や学校 YouTube の配信、タブレットの活用などさまざまな取り組みを進めました。

○コロナ禍で頑張る方々へ感謝状を

コロナの影響で学校が休校中、５年生の数名の児童がインターネット会議システムで連絡を取り合っていたときのことです。

児童たちは「私たちは外にも出られないけど、社会のために働いてくれている人々に感謝を伝えたいね。」「どうしたらいいかな。」「感謝状にしたらいいんじゃない。」などと考えや思いをふくらませていました。するとその後、保護者のバックアップもあり、児童たちのアイデアの実現に向けた動きが進んでいきました。感謝状の届け先は、市役所や新聞社から、警察署、宅配便や郵便配達の人々、ごみ収集の人々、近所のスーパーマーケットへと、次々広がっていきました。



そこで私は、休校明けに代表児童が校長室を訪ねてきた際、今の人数ではこなしきれないのではないかと、感謝状づくりをク

ラスで提案するよう助言しました。果たして児童が感謝状のことをクラスで話すと、みな口々に「やりたい」「頑張ろう」と声を上げ、活動の幅はさらに広がっていきました。「休校中、オンラインで朝の会をやってくれた先生方にも送りたい」と言った子もいたそうです。

この活動は、５人の有志から、クラス、学年へとどんどん広がりを見せ、最終的につくった感謝状は何と 120 枚以上にもなりました。最終的に、その感謝状は、夏休みに教員や保護者が手分けして届けたのでした。

感謝状は、Ａ４サイズのケント紙に、手書きの文字と学校のキャラクターである「三小（ミコ）ちゃん」などのイラストを添えた手づくりのものです。

○先輩方のためにありがとう――「６年生の移動教室実施に感謝」

２学期に６年生の移動教室が実施されたことを踏まえ、５年生の児童がバスの乗務員の方にも感謝状をおくりました。

昨今、移動教室は多くの自治体が中止していますが、本市や本校では「一生に一度の思い出だから、何としても行かせたい」と実施を模索しました。その結果本校では、宿舎やバスの「密」を避けるため、２泊３日の予定を１泊２日に縮小してバスも増車する形で、110 人の児童全員が参加する移動教室が実現しました。

バスの車内では「密集・密接」を防ぐことに配慮し、車内ではこまめな消毒や換気を徹底しました。また、車内のレクリエーション（バスレク）ができないため、かわりにバスガイドの方が、事前に観光案内などを精力的に準備してくださいました。

「６年生が無事、旅行ができたのも皆さんのおかげです。」と感謝の言葉を述べながら、５年生の児童たちは乗務員の方に感謝状を手渡しました。

○私たちも何かできないか――地元の医療機関に千羽鶴を送る

５年生が行った感謝状贈呈の活動は校内に広がっていきました。すると、４年生が近くの医療機関で働く人々に対して感謝の気持ちを伝えたいと考え、学級会で話し合いました。

そこでは、「５年生が頑張っているのだから、私たちも何かできないかな。」「千羽鶴はどうだろう。」「来院する人々にも見てもらえるかも。」などといった意見が次々出て、休み時間などを利用して千羽鶴をつくることになりました。でき上がった千羽鶴は、直

接児童が手渡すことはできないため、宅配便を利用したり、担任が医療機関に届けたりしました。

届けられた千羽鶴は、早速病院の総合受付に飾られ、お礼の手紙をいただきました。

○青少年赤十字委員会の活動

本校は、青少年赤十字に加盟して２年目になります。今年度から、児童会活動の一環として赤十字委員会が発足しました。５・６年生が赤十字の紹介を行ったり、三小づくり会議（代表委員会）に提案してコロナ禍で活躍する人たちのために募金活動も始めたりしました。

本校では、自分たちにできることを「気づき、考え、実行する」ようにしており、今後は地域清掃やプルタブの回収も行う予定です。

○活動を振り返って

５年生の数名の児童の思いつきから始まった「感謝状活動」。感謝状をおくった先の方から「感謝状に感謝」といった大変うれしい対応をいただいただけでなく、地元の FM 放送局からはインタビューも受けました。また、新聞やタウン誌にも紹介されるなど、子どもたちはその反響の大きさに大変驚いていました。さらに、ある企業からは、社会科見学の実施が難しいと思われる中、バーチャル見学の企画の提案までいただきました。

こうした活動は、学校や教師からの一方的な働きかけではなく、児童たちが自主的、自発的に行っているということに価値があると思っています。「社会参画」への意識の醸成と「働くこと」の意義の理解について、教師からの投げかけではなく、児童たち自身からの発意、発想であることが何よりうれしいのです。

現在も、いまだに全校朝会や集会ができず、オンライン放送での実施です。コロナ禍が収束しない中、子どもも大人も制限された生活をしています。そのような中でも、子どもたちが「たのしい学校」生活を送れるよう、私を含めた全職員が子どもたちを見守りながら、引き続き適切な支援を行っていきたいと考えています。

（校長木田明男・記）